

熊野の
木林から

怪熊野

「旧・中辺路町の怪異(其の四)」

和歌山大学
システム工学部
環境システム学科
中島敦司教授



中辺路の河童は、大きな川だけでなく意外な細流で水浴びしていることもあるという。(イラストはBoBo)

旧・中辺路町にも、他の熊野の地と同じように河童(かっぱ)の話が伝わる。例えば、近露(ちかつゆ)の河童ゴウライボシの話では、河原に馬をつないでおいたところ、河童が馬を引き込もうとして綱を自分の体に巻き付けた。馬が急に駆け出して家まで帰ったので、河童は綱を放す余裕もなく家まで連れて来られた。家の者は河童に気づき捕まえたところ、河童が「これから悪い



其の七十

ことはしないから助けてくれ」と懇願する。そこで「松の木淵の松が天に届くまで、橋谷の枝垂松が地に届くまで、そして下宮の狛犬(こまいぬ)が腐るまで、再びこの地には出てこない」と約束させて放してやったという。この河童話は、西牟婁の各地に伝わる河童話と大いたい同じである。

温川(ぬるみがわ)の河童ガイラボシの話は、恐ろしい。このガイラボシはきれいなかんざしを頭に挿しているそう、里の娘しげのはガイラボシのかんざしが見たくて毎晩のように川へと通った。しばらくたつて、しげのは頭にかんざしを挿したガイラボシに出会う。しげのは、かんざしの美しさに引かれ、ますます川に通うようになる。ある晩のこと、しげのが川辺を歩いていると、ガイラボシが川の中から手招きする。しげのは誘われるままに川に入り、深みにはまり溺れ死んでしまった。それからこのふちを「しげの淵」と呼ぶように



熊野の河童は、夏は川にすみ、冬になると山に登るといふ。その姿は小さな子どもくらいの大きさと、青い着物を着ていることも、一本足のこともあるという。山で青い着物を着ているモノは魔物であるともいふ。(イラストはBoBo)

なつたという。河童がかんざしで人を深みに誘う話は、上富田の生馬にもあるが、紀南では少なく、紀ノ川など紀北に多い話だ。

高原の河童は、夏は川にいて、ゴウライと呼ばれる、冬は山に入ってガシランボと呼ばれる。体に松ヤニをぬつているかのように光つていて、小さい子どもくらいの大きさとという。これは、熊野の典型的な河童話と似ており、体に松ヤニをぬつているという部分は特徴的である。他の話では、山に登った河童は青い段だら模様の着物を着ているというものがある。青い着物の話では、湯川には、山で赤い着物を着ている女に出会うと、それは山ノ神様だが、青い着物の女ならば人に害をなす、という話が伝わる。青い着物にどういう意味があるのかは不明だが、河童であつたり人に害をなすということでは共通している。

中島敦司(なかしまあつし)教授プロフィール
昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗(妖怪、伝承)。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30〜50日は訪問し、研究する。

